

講義概要

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科

西洋哲学史概説第1部（水曜3限・学部）：形而上学の誕生・展開・転回

アリストテレスからドゥンス・スコトゥスを経てスアレスに至るまでの西洋形而上学の展開を概観することを通して西洋古代・中世哲学史を概説する。アリストテレスの『形而上学』という著作が、その名称に関してもその全体の構成に関しても、現在私たちが手にしているような形での公刊がアリストテレスその人によって意図されていたわけではない、ということは周知の事実だが、西洋形而上学の思考の特質が、この著作にプログラムの形で示されているのもまた事実である。この著作に体现されている形而上学的思考の誕生を出発点にしながら、注釈者たちにおけるその展開を辿った後、（カント哲学の位置づけなどを視野に入れつつ）ドゥンス・スコトゥスにおける「第二の形而上学」への展開の意味を探り、次いで、スアレスにおける形而上学の体系化についてまで議論を進めたい。

哲学演習（木曜2限・学部）：デカルト哲学研究

若きデカルトの未完の著作である『理知能力指導の諸規則 *Regulae ad directionem ingenii*』（1627-1628[?]. 以下、『規則論』）を三年計画で精読する。『規則論』において、デカルトは自らの方法論を開陳すると共に、デカルトに特有の思考のあり方をよく示している。またこの書は筆写本等を通してライプニッツやロック、そして（恐らくは）スピノザなどにも大きな影響を与えている。＜古典主義時代のエピステーメー＞の雛形と言ってもいい『規則論』の講読を通して、デカルト哲学、さらには近世哲学の固有性と豊穡さを掘り取ることを目指す。併せて、諸概念のテキスト内における相互連関・概念史的な系譜に対する繊細な眼差しを必須の要件とする、哲学の古典文献に関する読解技法のトレーニングを行う。なお、原典はラテン語だが、マリオンらによるフランス語訳も配布するので、ラテン語未修の場合にはフランス語訳による演習参加も可とする。

哲学演習（水曜4限・大学院）：現代フランス哲学研究

20世紀後半を代表するフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの主著の一つである『差異と反復』の総体的な読解を一年限りで行う。『差異と反復』は、ドゥルーズの差異哲学が体系的に提示された著作だが、議論の圧縮度が高く、また扱われる素材が多岐にわたるので、その読解のためには解凍作業が不可欠であるにもかかわらず、それに相応しい作業は十分には遂行されておらず、さらに、この著作の全体としての意義もまた十分には検討されていない。そこで、各章毎に中心問題を浮かび上がらせた上で、解凍作業を行い、この書の意義を哲学的に解明することを目指す。併せて、現代哲学読解に必要な技法に関するトレーニングも行う。

学習院大学文学部（非常勤講師）

思想史特殊研究（火曜5限・学部大学院共通）

スピノザ・ライプニッツというポスト・デカルトの二人の哲学者の思索の意味と射程を、＜力の形而上学＞の観点から検討する。自然的世界から基本的には力の概念を排除したデカルトに対し、スピノザとライプニッツは力の概念を自然的世界に再導入することによっ

てダイナミックな形而上学を形成した。そこで、スピノザ形而上学とそれに対するライプニッツの批判の内実を論点毎に詳細に検討することを通して、近世大合理主義哲学の射程を測定すると共に、これら二人の哲学者の思索から大きな影響を受けて形成された現代フランスにおける形而上学の新たな展開の意義についても考察したい。